



説明文を読解するのが苦手な児童生徒が多いのが課題です。



段落の意識がなく、文章全体を「内容のまとめり」として捉えられていないのかもしれないですね。

小学校では、3、4年生の国語科で段落について学習します。段落相互の関係に着目すると、文章全体の構成や筆者の工夫をとらえやすくなります。

指導事項 読むことC(1)アの系統 ※全ての学年において1学期の単元に設定されています

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、 内容の全体 を捉えること。	段落相互の関係に着目しながら、 考えとそれを支える理由や時間との関係 などについて、叙述を基に捉えること。	事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、 文章全体の構成を捉えて要旨を把握 すること。

小学校低学年では「段落」という用語は扱いませんが、「内容のまとめり」として捉える学習を行っています。説明文を読む際には**児童生徒自らが段落の意識を持てるようにすることが大切です。**



小学校中学年以降は、先生の指示がなくても、①から④までの手順は**子供が自主的**に行うことができるようにしましょう。

①段落番号をつける

②説明文を「はじめ」「中」「終わり」の3つの意味段落に分ける

3つに分けることは目的ではなく、「話題の提示」「具体例」「結論」という概念を習得するためのプロセスです。この3つの概念を「内容のまとめり」として意識しながら文章を読めるようにしていくことが大切です。

③「筆者の考え(主張)」を探す

「説明文は筆者が自分の考え(主張)を伝えるために書いているもの」であり、「筆者はそれをより分かりやすく読者に伝えるために、段落構成の工夫をしている」という前提を、まずは子供と共通理解しておく必要があります。筆者の主張(結論)は「終わり」に書かれていることが多いので、そこに着目して探すようにしましょう。

④問いかけの文に傍線を引き、その答えを探す

問いかけの文は見つけれられても、その答えを探すのは容易なことではありません。そこで、具体例の文や段落は()でくるなどして、再読の対象から外して読む習慣をつけることをお勧めします。具体例を外すと要点が残るので、答えを見つける手がかりになります。

①～④までの手順が自分一人でできるようになるまでには、様々な説明文を用いて実際にやってみることが必要です。帯時間等を活用して、説明文にふれる機会を増やしていきましょう。

帯時間の活用例

- ・下の学年の説明文教材(短いもの)を使って、①～④が一人でできるかどうかを確認する。
- ・構成を捉えやすい説明文をいくつか用意し、制限時間内に①～④のどこまでを一人でできるか挑戦してみる。

1年生の「いろいろなふね」は文構造を捉えやすく、何年生でも活用できます。

